

福島県立医科大学 学生災害ボランティア活動報告会レポート

東日本大震災発生直後から、福島県立医科大学の学生たちが立ち上がり、ボランティア団体が結成され、県内あるいは県外で災害ボランティア活動が行われました。ボランティアの活動内容や活動を通して学生自身が感じたことなどを発表するべく、学内でのプレ報告会、コラッセふくしま（福島市）でのFUKUSHIMA WILL…学生災害ボランティア活動報告会として、6月下旬から7月初めにかけて開催されました。発表する場を設けることで活動を記録として残し、団体の枠を超えて経験を共有したい、この経験や福島のパワーを県内外に発信したいという思いが込められた報告会。その様子をお伝えします。

FUKUSHIMA WILL…学生災害ボランティア活動報告会

日時：平成23年7月3日（日） 13:30～16:30

場所：コラッセふくしま 3階 企画展示室

対象：医療系学生、興味関心のある地域の方々

会場の様子



開会のあいさつ



実行委員長 医学部6年 齋藤 伴樹くん

<学生災害ボランティア活動報告>

活動内容の異なる5つのボランティア団体が参加しました。活動内容や団体設立に至った経緯、動機、活動を通して感じたこと、問題点などについて、写真やデータを交えて発表されました。震災を経験したからこそできることがある、被災された方のために何かしたい、福島に恩返しをしたい、それぞれの思いを胸にみなさん活動をはじめられたそうです。各団体の発表のたびに、会場から大きな拍手が送られました。（以下発表順）

1 避難所での支援活動

発表者

医学部4年 佐々木 理さん

医学部6年 豊田 喜弘くん

活動内容

エコノミークラス症候群予防体操の指導、避難者のニーズの聞き取り、炊き出し、娯楽・嗜好品の提供、小・中・高生への学習支援、など

感じたこと

- ・支援者も被災者も精神的不安を抱いている
- ・物資供給が不足している
- ・行政と現地との間にギャップがある
- ・学習支援の活動では逆に子どもたちから学ばされることが多かった

気づいたこと

- ・情報の共有不足
- ・避難所によっては医療従事者などの姿がない
- ・避難所生活にストレスを感じる人が増加している
- ・継続的な支援が必要
- ・継続的な支援が信頼関係を作る



2 福島医大赤十字奉仕団の活動



発表者

医学部4年 荒井 勇人くん

医学部4年 鈴木 美香さん

活動内容

避難所で高校3年生以下を対象に学校の宿題の手伝い、子どもたちといっしょに工作やゲームなどをして遊ぶ

感じたこと

・自分たち自身が笑顔でいること、楽しむことが大切

・避難所の子どもたちはストレスや不安などにより、感情の起伏が激しい状態

・親も疲れている様子

気づいたこと

・子どもたちの個性に合わせた指導が必要

・精神面の配慮→聞き手にまわり、カウンセラーと協力体制をとる

・ストレスや不安を解消できる場所が必要

・自分たちが笑顔で接することで子どもも笑顔になる



3 東北関東大震災学生募金ネットワーク

発表者

医学部2年 高岡 沙知さん

団体設立のきっかけ

・震災直後、関東に実家などがある学生が避難→日本医科大学の学生とともに募金活動を開始

・福島県人として、福島医大生として被災地を支えたい

活動内容

千葉県JR船橋駅前・津田沼駅前での募金活動（募金総額：137万7185円）、福島駅東口ロータリーでの募金活動（募金総額：29万7294円）、被災地で活動するボランティアや医療従事者へメッセージ募集（97名）

感じたこと

・人と人の強いつながり

・協力を呼びかける側としてもっと被災地の現状を知る必要がある



4 医大病院 学生ボランティア



発表者

医学部6年 垣野内 景くん

活動内容

外来業務補助（検体搬送・薬剤部で処方箋引き換えなど）、構内案内（医療支援チーム・患者）、節水呼びかけのポスター作成、見舞い品搬送、患者搬送、など

感じたこと

・大学や先生方との、学生同士の信頼関係を確認できてよかった

・大学や病院と相互的にかつ自主的な活動ができた

・将来に向けての意識が向上した

問題点

・情報不足により予定が見えず、待ちぼうけ続きで士気の維持が困難

・学生という立場だからこそ道標や守護者が必要

・医学生には看護技術の知識が不足



5 第3学年 相馬ボランティア

発表者

医学部3年 嶋崎 敬一くん

団体について

- ・医学部第3学年有志29名
- ・活動目的→津波被害が大きかった相双地区における中期的な復興支援

活動内容

がれき撤去、床上や床下の泥のかき出し、避難所での中高生への学習支援、ベットのための避難所運営、支援物資の運搬、など

メッセージ

- ・今回の震災でボランティアを行った人は、もし何かあった時にはいち早く被災地に入るべき
- ・避難所レベルで言えば震災のその日からやれることは山ほどある。ただし、経験がなければ迷惑になるのも事実



<パネルディスカッション>

前半での各団体の報告内容を踏まえて、パネルディスカッションが行われました。団体の枠を超えて考えを共有し、みんなで一緒に未来にむけて発展させていきたいとの想いから、2つのテーマ「今、私たちにできること」「未来へのメッセージ」に沿って活発な意見が交わされました。以下に意見の代表的なものを紹介します。

テーマ1 「今、私たちにできること」

i 避難所での支援活動

- ・友人の一人として、被災者が「落ち着いた」と感じるまで関わり続ける

ii 福島医大 赤十字奉仕団

- ・被災状況を自分の目で知り、考え、話し合う
- ・長期休みを利用して活動を続け、現状とニーズを知る

iii 東北関東大震災学生募金ネットワーク

- ・学生でも、誰でも出来ることがあることを伝えていく
- ・被災者だけでなく、支援する人たちも支えていく
- ・継続した支援の必要性を伝えていく

iv 医大病院 学生ボランティア

- ・単純に継続することがよいわけではないと認識する
- ・今後の役に立つ形で記録する

v 第三学年 相馬ボランティア

- ・震災の現実を風化させず、私たちが見たこと、感じたことを自分の言葉で伝えていく



テーマ2 「未来へのメッセージ」

i 避難所での支援活動

- ・「次に震災に遭遇することがあったら・・・」「別の場所で震災が起きたら・・・」その時、自分に出来ることを考えてみる。そして、その気になれば今からだってボランティア活動ができる

ii 福島医大 赤十字奉仕団

- ・子供たちの差異に着目した学習支援
- ・カウンセラーと共同で子供の精神面への配慮を行う
- ・子供の遊び場や物品の確保、精神的なケア

iii 東北関東大震災学生募金ネットワーク

- ・支援活動は場所を問わない

iv 医大病院 学生ボランティア

- ・平素からの信頼関係の構築が重要
- ・医学生に対する看護技術教育は必要ではないか
- ・学生にも災害対策訓練の機会を与えると災害時の活動参加が期待でき



る

v 第三学年 相馬ボランティア

- ・行政の指示を待っているどうしてもネットワークが遅くなる
- ・ボランティアの受け入れ態勢が整っていないからまだ来るなどということが連日報道されたが、避難所レベルでは震災のその日からやれることが山ほどあった



閉会のあいさつ



実行副委員長 医学部6年 豊田 喜弘くん

実行委員長 齋藤くん、実行副委員長 豊田くんへのインタビュー

報告会開催のきっかけは？

豊田くん

僕は避難者支援をしていたんですが、医大ボランティア団体に所属している齋藤くんとは空手部の先輩、後輩の仲でもあるんです。僕らの活動を発表する場が持てたらと二人で考えておまして、医療人育成・支援センター 准教授である大谷先生に相談しました。先生にアドバイスをいただきながら、他の団体でボランティアをしていた学生たちにも輪が広がり、それぞれの活動を紹介し合おうということで、今回の報告会に至りました。

今回の活動は今後の進路、目指す医療にどう影響すると思いますか？

齋藤くん

今回の震災をきっかけに進路が変わらなかった学生はいないと思いますね。ただ、今回の活動を通して医療など専門的な面での影響というより、ボランティア活動など組織で協力して運営していくうえでシステム上の問題点などを発見したことや、マネージメントの仕方を学んだことが大きかったと思います。今後、何かを立ち上げる時などにも役立つ経験でした。

報告会を終えての感想やメッセージをお願いします

齋藤くん

今回の報告会が、これからボランティア活動をするきっかけになればうれしいし、実際、活動するうえで参考にしてほしいと思います。第1回目の報告会が実現したわけですが、第2回、3回と継続して活動を発信していきたいですね。福島に残りたくても、地元に戻らなければならない学生もおり、今後散り散りになってしまう可能性があります。今後は福島に対して、離れていても支援し続けられるようなシステム、体制を作って、継続して今後の福島を支えていくことができればと思います。今回の活動を通して、福島県外のボランティア団体とも繋がりを持つこともできたので、協力しながら継続して発展していきたいです。

豊田くん

福島医大、福島大学、県内外といった枠にとらわれず、ボランティアの輪を広げていきたいです。これで終わりではなく、ここがスタートだと思います。僕は関東出身ですが、今後も福島の医療を支えたい、福島を良くしたいという想いがこの震災を機にさらに強くなりました。福島県は医療面で絶対的に不足している面があるのではないかなと感じているので、少しでも改善できるように協力できたらと思います。また、自分のやりがいにも繋がると思います。受験勉強で忙しかったのですが、またとない機会に参加できて満足していますし、成果を出し切ったと思います。次は医療の現場で貢献していきたいですね。



齋藤くん

豊田くん

大谷先生

今回の報告会のタイトルでもある“FUKUSHIMA WILL…”を考案したのは豊田くん。福島に住む人、関わる人が、福島の未来がどうあってほしいか考えながら、ほんのささいなことでも行動できればよくなっていくのではという想いを込めて。





福島駅前住民の方からいただいたというメッセージ

学内でのプレ報告会の様子

6月27日（月）～7月1日（金）の昼休みの時間に講義室などで行われました。



※内容は上記報告会と同様

取材を終えて

福島を良くしていきたいという学生のみなさんのパワーを感じました。異なる団体で従事していた学生のみなさんが、同じ場で活動を報告しあったということで、それぞれの立場の視点、支援、アプローチの違いを比較しながら活動内容を聞くことができました。それは発表した学生のみなさんも同じだったようで、ディスカッションの際にも、活発に意見交換がされていました。団体によって、見解が異なる場面もありましたが、所属が違っても、福島を良くしていきたいという目的が同じだからこそ、会場には一体感があったように思います。それは、聴衆との間にもあり、ボランティア活動の経験のある学生さんを中心に、自らの体験を交え、積極的に質問されていました。

齋藤さんと豊田さんの福島に対する想いが、大谷先生を始め、人とのつながりを生み、その輪が広がっていき、報告会という形で表現されました。さらに、その想いがこの報告会をきっかけに、より多くの人々の心に火を点け、新たに広がるでしょう。報告会を終えて、充実感いっぱい取材にやっていただいた二人の笑顔も印象的でした。こんなにも福島のために頑張っている学生がいることに感動したのと同時に、彼らのような若い世代にも支えられて福島は必ず復興していくのだろうと心強く感じました。

次回は、災害ボランティアに参加した学生のみなさんにボランティアを振り返っての取材をさせていただいたので、その模様をお伝えします。